中国における「方言」　ー境界と越境ー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050856

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

中国における「方言」 ―境界と越境―

岩田 礼

1. はじめに

小論は、二〇一六年二月十三日に国立国語研究所で開催されたJLVC2016「再考 ことばの時空間」のワークショップ「方言、言語、そしてその領域をめぐって」における発表内容を敷衍したものである。オーガナイザーの大西拓一郎氏から依頼されたことは、中国では「方言」がどのように認識されているか、「言語」とどう違うか、日本とはかなり状況が異なると思われるので、方言学の基本領域に関する事柄を紹介してほしい、というものであった。ワークショップでは、大西氏の基調報告に続いて、琉球大学の狩俣繁久氏（「琉球方言か琉球語か―名称の変遷をめぐって」）、岩田（「中国における〝方言〟」）がそれぞれ報告し、最後に首都大学東京のダニエル・ロング氏がコメントを述べた。

2. 「中国」とは？「中国語」とは？

現在、日本の大学の教室などで教授されている「中国語」とは、漢民族（以下「漢族」と呼ぶ）の話す言語である漢語を指す。漢族の居住地域は、殷代以前には黄河中流域（現在の河南省周辺、

狭義の「中原」に限られていたと考えられる。そこで話されていた言語が現代の漢語の祖先ということになるが、それはオーストロネシア系の言語を起源とするという説もある（Sagart 1993）。漢族と漢語の領域は殷代になると黄河中下流域の全域（広義の「中原」）に広がり、また周代に至ると長江流域にまで広がった。しかしこれは長江以北（以下「華北」と呼ぶ）の地域がすべて漢語を話す漢族の領域になったことを意味しない。「中國、夷、蠻、戎、狄，皆有安居、和味、宜服、利用、備器，五方之民，言語不通」（『礼記』王制、第五）というように、「中国」は住居、衣食等の文化的習慣及び言語を異にする「夷、蠻、戎、狄」と共存していた。

「五方之民，言語不通」という時の「言語」が現代でいう所の言語差であったのか、或いは方言差であったのかは、いずれとも断言できない。春秋戦国時代に長江流域で栄えた楚は独自の文化を有し、その支配層は漢語を使用する漢族であったに違いないが、庶民が漢語を話したかどうかは疑わしい。当時、漢族は楚より南の地域にも居住したにはずだが、それは「点」であって、周囲は「百越」と総称される非漢族に取り囲まれていた。

長江以南の地域（以下「華南」）に漢族が入植するきっかけとなったのは、秦の始皇帝による嶺南攻略であった（嶺南とは南嶺山脈以南の地域、主に現在の広東省、広西チワン族自治区）。

及至始皇，…（中略）…南取百越之地，以為桂林、象郡，百越之君俛首係頸，委命下吏。（『史記』、巻四十八、陳涉世家）

右の一節からだけでも過酷な侵略であったことが窺われる。しかし、軍を先鋒とする入植は、

新大陸におけるヨーロッパ人の入植と同じことで、総体としては「点」と「線」による統治であった。華南における漢族人口の増加は唐代まで待たねばならない。

陳正祥『中国歴史・文化地理図冊』（原書房、一九八二）は、正史などの歴史資料に基づいて推定された各時代の人口分布を地図にして表現している。その図19、20（前漢）と図29、30（唐）を比較すると、漢代には華北に偏在した人口が減少し、その分、現在の江蘇省南部と浙江省を中心とする華南の人口が増加した印象である。人口分布のこのような変動は、三世紀～六世紀の政治的動乱期に（下文参照）、大量の移民が華南に移り住んだ結果とされるが、それはおそらく戦火を避けたという受動的な要因だけであったのではない。三国から隋唐に至る期間における江南開発によってむしろ積極的な移住が促されたのだろう。言語については、移民の影響だけでなく、経済要路としての水路、陸路の開発・整備も漢語の北から南への伝播を促進したはずである。

その後、華北には、遼、金、元と三代にわたる異民族王朝ができたが、漢族王朝たる明が建国されると雲南が征服され、さらに二十世紀に至って満州、新疆、チベットが中国の版図に組み込まれる。漢人の新しい入植地では当然漢語が話されるので、周辺の非漢族は経済的、政治的理由によって自らも漢語を話すようになる。

このように、漢族と漢語は歴史を通じて「内」から「外」への膨張を続けてきたのであるが、一方で「外」から異民族が侵入した場合に、それが結局は「内」に取り込まれてしまうという歴史があった。三世紀～六世紀の魏晋南北朝時代（六朝時代とも呼ばれる）には華北に異民族の短

命王朝が次々に打ち立てられたが、五世紀に華北を統一した北魏は漢化政策を進めたことで知られる。その第六代皇帝であった孝文帝の詔勅は有名である。

詔不得以北俗之語言於朝廷，若有違者，免所居官（四九五年）。

「北俗之語」とは鮮卑語のことであり、自らの母語を捨て去ることを命令しているのである。

北方中国語が遼、金、元の四百年間に大きな変化を遂げたのは、支配階層たる異民族の母語であったアルタイ系諸語の影響を受けたものとする説がある（橋本萬太郎『言語類型地理論』、弘文堂、一九七八）。しかしこの説を実証的に裏付けることは容易ではない。語彙の借用は容易であるはずが、元曲などの口語作品に現れたモンゴル語の音訳らしい多数の語で現代に至るまで残っているものは数少ない。二十世紀初頭まで中国の支配者であった満州族に至っては、百年後の今日、その母語たる満州語が—移民政策によって新疆に移されたシベ語を除き—絶滅に瀕している。これも異民族王朝たる清朝自らの同化政策の結果である。

「内」に取り込まれた異民族は「中国人」となる。先に挙げた北魏の孝文帝はその名を拓跋宏と言ったが、漢人風に元宏と改名した（姓が元）。全国を統一した隋にしても、初代皇帝・文帝となった楊堅は普六茹氏という異民族の出身であったとする説があり（アーサー・F・ライト著、布目潮渢・中川努訳『隋代史』、法律文化社、一九八二）、また文帝の高官であった陸爽（韻書『切韻』の作者・陸法言の父）は、歩陸孤氏という鮮卑系の出自であった。

上で述べた「内」と「外」の概念は、平田昌司氏の「雪晴れの景色—中国言語文化圏の「内」

と「外」」（『中国―社会と文化』九、一九九四）に負う所が多い。この論文が引く韓愈（768-824）の『原道』は、中国人とは何かを端的に語っている（42頁）。

孔子が『春秋』を表すにあたっては，国々の君たちが異民族の制度をそのままにしている場合は異民族扱いし，中国の「礼」をとりいれた場合には中国人として扱った。（原文：孔子之作『春秋』也，諸侯用夷禮則夷之，進於中國則中國之。）

これを逆に言えば、中国の礼法を受け入れぬものは夷狄として排除される運命にある。上記『史記』が記した「頭を垂れ、首をつながれ、処刑を待つ百越の君」とは、まさしくそのような人々の一人であった。中国人として扱われるもう一つの条件は「漢字を使う」ことである。阿倍仲麻呂が唐王朝で高官に任じられた前提は、中国人たるべきこの二条件を満たしていたことであった。

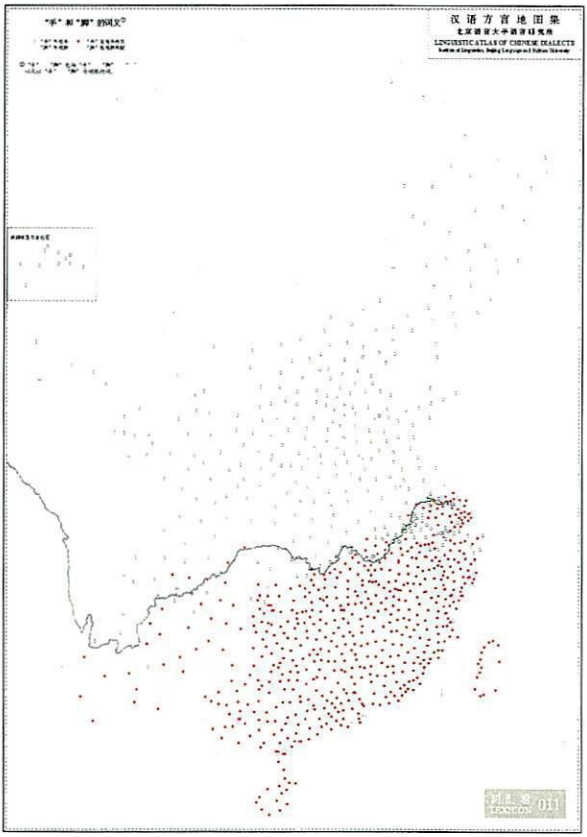
3．漢字の越境性

漢字は、一般にはローマ字などの表音文字に対する表意文字と呼ばれるが、意味を直接に表現しているわけではない。その本質は「表語機能」にある（河野六郎『文字論』、三省堂、一九九四）。即ち、意味と音からなる一つの語を一つの文字によって表現する記号体系である。ちなみに、本来は表音性が高かった文字でも、英語のスペリングのように表語化してきたものもある。英単語は綴り字通り読んでも正しい発音にはならない（例えば knife）。

表語文字たる漢字は、意味と発音の地域的変容を無限に許容すると言っても過言ではない。例えば、左図において「手」と「脚」は長江以北では hand と foot しか指さないが（青色の記号）、長江以南では arm も leg も指す（赤色の記号）。

地図１　“手”、“脚”の指示対象

曹志耘主編『漢語方言地圖集』、語彙巻011、2008



漢字が東夷の地に伝わると、多くの場合、その原義は忠実に保存された。例えば上記「脚」は日本で leg の原義が保存された。そこで、意味がラディカルに変化した中国本土の北方方言との間で「同字異義」の例が多数生まれた。北方方言で leg は太ももを指した「腿」によって表されるようになり、「脚」の指示対象は foot に縮小した。

音声の地域差がさらに大きいことは言うまでもない。中国から伝わった発音は日本漢字音と呼ばれるが、例えば「手」を漢字音でシュ［ʃu］と呼ぼうが、訓読みでテ［te］と呼ぼうが、漢字の発音であることに変わりない。現代中国語の標準音は［ʂou］であるが、広州では［ʃau］、厦門では［tsʰiu］であって、中国的感覚では日本漢字音もそのような地域的発音の一種なのである。従って、例えば、魯迅を漢字音でロジンと読もうと、標準中国語らしくルーシュンと読もうと、所詮はいずれも東夷の訛った発音にすぎない。日本の文化人やマスコミには、人名や地名を相手国の言語の発音で読むべしという「原音主義」が根強く、それは彼らにそれが相手文化の尊重であるとの勝手な思い込みがあるためだろうが、呼ばれる本人にとってはどちらでも同じことである。

「手」は hand、main などと発音しても構わない。これはラテン語の manus を hand、te などと発音するようなものであるが、赤ん坊に「騎士」ナイト、「火星」マーズなどと名付けるキラキラネームは現に一世を風靡している。漢字は意味も発音も異なる地域的変種（異語）を同じ一つの文字で表現できる点で、その「越境性」は所与のものであった。

隋唐時代の中国標準音（中古音）の発音をはじめて音声記号によって復元して見せたのは、ス

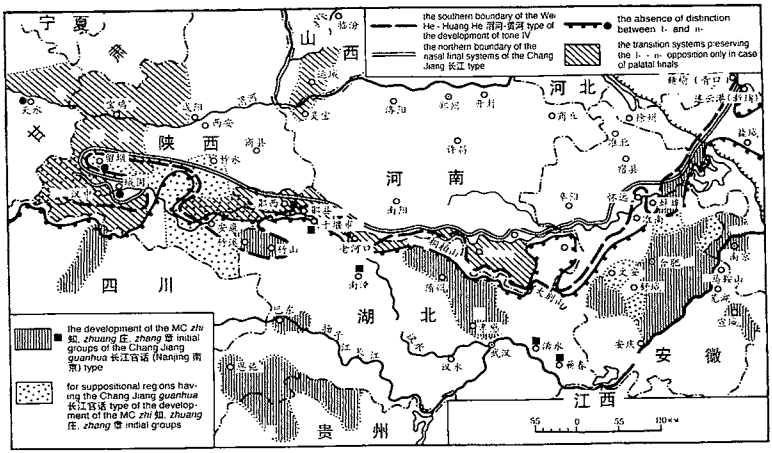
ウェーデンの碩学カールグレン（Bernhard Karlgren, 1889-1978）であった。その大著『中国音韻学研究』の末尾に付された「方言辞典」（Dictionnaire）には、彼が古音復元のために用いた二十六種の「方言」が挙げられている。ところが、そのうち最初の四つは、呉音、漢音、朝鮮漢字音、越南漢字音という「域外漢字音」であり、それが漢語方言と対等に並んでいる。ここに漢字を媒介とする中国の方言研究の原点があり、その伝統は今日に至るまで継承されている。方言学を学ぶことは、即ち漢字とその音声を中古音の枠組みとともに学ぶことに他ならない。

漢字で書かれた中国の文言文（＝漢文）は、西欧社会のラテン語に匹敵する東アジアのリンガ・フランカであった。漢字と文言文を通して見る中国は、平田昌司氏の譬えを用いれば、「あたかも一面に雪が降り積もった景色に似ている」（「雪晴れの景色」45頁）。つまり白一色であって、それはどこまでも広がりうる。ではその雪を取り払った時にどんな景色が見えてくるか？

4．中国における方言分布の概観

ある言語における方言分布の輪郭は、当該言語が話される地域の形状によって決まる。日本語は東西に長い列島に存するので「東西対立」型となる。フランス語やドイツ語が「南北対立」型となるのも国土の形状に因っている。現代漢語方言も同様に「南北対立」型を示すのは、第二節で述べた歴史的要因による。対立する二つの方言勢力がどこで境界を接するか（方言境界線）はこれまた歴史的要因による。中国には漢語方言を二分する二つの重要な境界線がある。

地図２　淮河－秦嶺線



Map 7.　The boundary between the Northern and the Southern (the Chang Jiang 长江) *guanhua* 官话 areas

一つは上掲地図１に反映された「長江線」であり、もう一つは地図２に反映された「淮河―秦嶺線」である。この地図はロシアの中国語学者、Ｏ・ザビアロバ氏の作で、日本で出版された科研費研究報告書に収められたものである（Zavyalova & Astrakhan, 1998）。

地図には四つの音韻的特徴に関する方言差が、境界線（通常「等語線」と呼ばれるが、この場合は「等音線」と呼んでもよい）又は分布地域の塗りつぶしによって表現されている。わかりやすい特徴として、音節頭子音（声母）l-／n-の区別、音節末鼻子音（coda）-n／-ngの区別があり、いずれも変化が起きた（子音の区別をなくした）のは、淮河と長江の中間地帯である。等語線の位置は奇跡的ともいえるほどよく一致し、等語線の束が長く伸びている。これらの音韻的特徴に関する差異が形成されたのは、比較的最近のことで、千年も

前のことではない。しかし、淮河—秦嶺線は、気候、土壌の南北差に関する境界線でもあり、「北麦南稲」の生活習慣をはじめ様々な文化的差異を生み出している。先秦時代の中原の南限がこのラインであったことからすれば、それは歴史上、長期にわたって北から南への言語伝播の波を食い止める防波堤であったと同時に、多くの言語特徴がこの線を越えて行ったはずである。越境した特徴がたどった運命は二つあった。一つは、伝播元の北方ではその後の変化によって失われてしまい、南方に保存された特徴。もう一つは、越境・南下の過程で変化を蒙った特徴である。後者について変化を促進したのは、土着の古い漢語方言又は非漢語との言語接触であった。

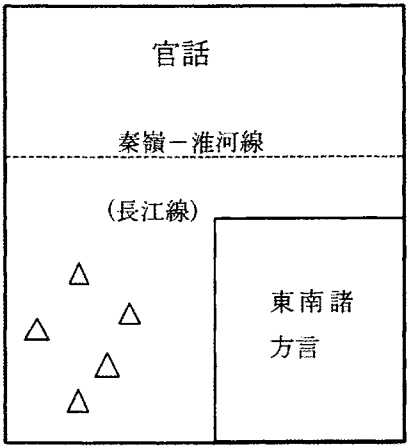
図1と図2だけ見ていると、中国の方言は単純な南北対立型であるかのようにみえる。ところが、同じく長江以南の地域でも、西側の雲南省、貴州省及びそれらと隣接する四川省、湖北省の一部など西南地域の方言には、むしろ北方方言と共通する特徴が多い。それはこの地域が主に明代以降に漢化され、北方方言が導入されたためである。「西南官話」と呼ばれている。

次頁の略図は平田氏「雪晴れの景色」の図二、図三（44頁）に拠る方言分布のスケッチである。ただし、原図とは異なる点がある。まず、地図3の長江線の表記は筆者が加えたもので原図にはない。長江線には、図1のように等語線が長江の下流から上流まで東西に延びる例が少ないことを考慮されたためかと思う。次に、地図3で淮河—秦嶺線でなく「秦嶺—淮河線」と呼ばれるのは、秦嶺山脈が西にあり、淮河が東にあるためで、位置関係からはこの呼び名が正しい。なお、平田氏の図二、図三は左右に配置されている。

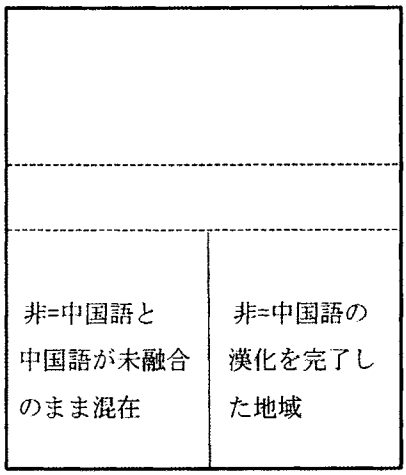
「東南諸方言」は、主に沿岸部に位置する呉語、閩語、客家語、粤語を中核とし（沿岸方言）、内陸部（相対的には西側）に位置する贛語、湘語、徽語は官話的成分をあわせもつ（内陸方言）。J・ノーマン氏(Jerry Norman)は、沿岸方言から呉語を切り出し、内陸方言と合わせてCentral Groupと呼んだ(Norman, 1988)。この分類によれば、中国大陸の右隅にノーマン氏のいうSouthern Groupがあり、それを取り囲むようにCentral Groupがあることになる。

いずれにせよ東南諸方言は、古代の百越の地に早期から漢語が移植された結果、「非=中国語の漢化を完了した地域」である。これに対して西南地域（地図3の△）は、漢語が移植されてから

地図３　方言分布の特徴



地図４　上図の基層（仮想）



の時間がたかだか六〇〇年であるため、「非=中国語と中国語が未融合のまま混在」している。そのため、表層では「官話地域」であっても基層が露出することがある。地図1に現れた綺麗な長江線はそのような露出の一つと理解できる。Hand と arm、foot と leg のような人間の認知形態を反映する区別は、「文化」の浸透を受け付けなかったのであろう。地図1と似て長江下流から上流まで等語線が延びる例として、他に「雨が降る」がある（岩田礼編『漢語方言解釈地図　続集』地図41）。北方では「下雨」、南方では「落雨」又は「落水」と言う。

もう一つ重要な事実は、西南官話の音韻構造が簡単なことで、声母、韻母、声調とも音素の数が少ない。簡略化は同音衝突を多発させるリスクがあるにも関わらず、音韻的合流が回避されてこなかった。一般に、言語接触による強いショックを受けた時、当該言語の音韻、文法は簡略化しやすいと言われている（「ピジン・クレオール化」とも呼ぶ）。西南官話はその例であるかもしれない。

本節冒頭で、「ある言語における方言分布の輪郭は、当該言語が話される地域の形状によって決まる」と述べた。これはおそらく通言語的、通時代的な普遍現象であって、漢族人口が華北に偏在していた漢代においては、地図1～4とは異なる分布構造があったと予測される。このことを立証するのが、今から約二千年前に編まれた方言辞典「輶軒使者絶代語釋別國方言」である。漢代の哲学者、楊雄の作と言われ、後世では一般に揚雄『方言』と呼ばれている。この辞典によって、我々は漢代における漢語方言の地理的分布状況の概略を知ることができる（松江崇「漢代方

言中的同言線束—也談根據《方言》的方言區劃論—」、華學誠等『揚雄方言校釋匯證』、中華書局、二〇〇六)。それによれば、当時の漢語方言は—予測通り—東西対立を分布の基本構造としていた。境界は日本でもよく知られた函谷関であり、関東方言と関西方言の対立、といえばなじみやすいだろう。うち関西方言の中核は漢代の標準語とも言われる秦方言であった。実際のところ、秦方言は同時に長江中流域の楚方言と対立し(西北vs東南)、揚雄『方言』によって知られる語彙の方言差が量的に最も多いのはこの二方言間である。しかし、漢代以前の長江中流域で漢語を話す人口がどれほどの比率であったか疑わしい。楚の地域がトータルに漢化し、方言分布が南北対立型に転換するためには、六朝から唐代に至る長い時間を必要としたであろう。

5. 方言の境界と方言区画

中国方言学のもう一つの伝統は、方言の境界線を定めるという「方言区画」である。上で挙げた呉語、閩語、客家語、粤語、贛語、湘語、徽語における「語」とは、英語、フランス語のような「言語」を意味するのではなく、方言区画上の一次カテゴリー(大方言)を示す。二次カテゴリーには「片」、三次カテゴリーには「小片」が使われる。例えば、蘇州方言は呉語・太湖片・蘇滬嘉小片に属する。方言分類の基準と術語は、中国社会科学院語言研究所の李栄教授が指導し、一九八七年に出版された区画方言地図集『中国語言地図集』(香港、Longman)に定められている。「語」にはこのほか、官話から析出された晋語(山西省、内蒙古に分布)と南方に点在する平話

がある（広西チワン族自治区など）。官話には他のすべての「語」と対立する大方言区の地位が与えられ、下位方言も西南官話、江淮官話などと呼ばれる。

『中国語言地図集』の方言区画は、一九二八年の中央研究院創設以来、趙元任に代表される中国の言語学者が手がけてきた方言研究の集大成である。趙元任自身にとって方言区画がどれほどの関心事であったかはわからないが、およそ近代国家の初期においては、その国にいくつの方言が存在し、それらがどこで境界を接するかに研究者の関心が向くのは無理からぬことである。日本では国語調査委員会の調査によって方言が東西対立を示すことが明らかとなったし、言語地理学の先駆けとなったヴェンカー（Georg Wenker, 1852-1911）のドイツ方言調査も、その動機は音韻法則の規則性を証明する方言境界線を明らかにすることであった。

方言区画は中国の方言学者の専売特許ではない。欧米も含んで、要するに中国語研究の世界では最もメジャーなトレンドの一つであった。例えば、アメリカのR・シモンズ（Richard Simmons、史皓元）氏が中心となって進められた江淮官話と呉語の境界地域に関する調査では、漢字を媒介としない音韻、語彙、文法調査が進められ、調査地点密度は他を凌駕するが、その目的は方言境界線の同定であった（史皓元・石汝杰・顧黔『江淮官話與呉語邊界的方言地理學研究』、上海教育出版社、二〇〇六）。

『中国語言地図集』の方言区画については、中国の内外でその原則や結果をめぐって様々な意見が出ている。また区画論が研究の主要トレンドであり続けたことは、二〇一二年に『中国語言

地図集』の第2版が商務印書館から出版されたことからもわかる。

区画理論として最も体系的なのは、項夢冰・曹暉『漢語方言地理學—入門與實踐』（中國文史出版社、二〇〇五）である（以下「項書」と呼ぶ）。この本は、その前半が欧米や日本における研究の歴史と成果の紹介を含み、啓蒙的である（書名にいう「入門」）。著者は等語線の検討によって区画を進めることを主張し、後半ではいくつかの原則の適用例を論じている（「実践」）。地図5はその一例である。

地図5　呉語の領域

項夢冰・曹暉『漢語方言地理學
—入門與實踐』図5-18

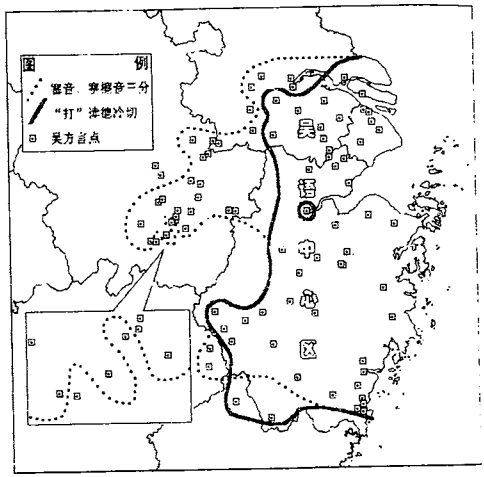


图 5-18 吴语中心区示意图

「呉語」とはなにか？趙元任『現代呉語的研究』（清華學校研究院叢書第四種、一九二八）は、「作業仮説」と断りながら、声母に無声無気音、無声有気音、有声音の三種類（例：p-、p^h-、b-）を有する方言と定めた（地図の凡例にいう「三分」）。一つの音韻特徴だけに依拠したこの定義は、『中国語言地図集』にも引き継がれたが、項書はもう一つの特徴を加えて等語線を観察した。それは、「打」をtaではなく、tang（日本漢字音で言えば「打擲」の「打」チョウ）と発音するか否かという一語に関する特徴である。地図5からわかるように、tangと「三分」の等語線はかなり重なるが、「三分」の等語線は西部の安徽省宣州地域にも伸びている。そこで項書はtangの等語線の内側の地域を「呉語中心区」と定めた。「方言は分類できるが、類と類の間には必ずしも絶対的な境界は存在しない」という「中心典型原則」の一例である（項書、156頁）。これは言語地理学に接近した方言の捉え方である。

さて、ここで浮かぶ一つの疑問は、「語」などという紛らわしいともいえる術語を用いて行われる方言区画が、国家の分裂を容認しないこの国の国是といかに両立しうるかということである。区画論が盛んなのは、中国の学術の基本が伝統的に「分類」であったことから理解できる。しかしその分類が地理的概念を伴うのであれば、やはり国是に関わるというべきである。ここでは平田氏の次の比喩が有効であると考える。「ヨーロッパが懐石料理のように一品ずつの独立性を感じさせるのに対して，中国は松花堂弁当に似て一体性を印象付ける。つまりその像をとらえようとするとき，目に映るのは全体を一つにまとめる枠としての弁当箱である。ところがそれで終わ

るのではない。入れ子になっておさめられた小鉢は，実質的に独立の食器とみることもできる」（「雪晴れの景色」、45頁）。平田氏のいう「入れ子になっておさめられた小鉢」とは文化圏を謂うので、言語に関する「方言区」とは必ずしも一致しないのだろうが、この点はここでの肝要ではない。重要なのは、「全体を一つにまとめる枠としての弁当箱」があることである。それが戦艦の鉄板のようであれば、その中に収められた小鉢がいかに「独立した食器」であっても許容される、そういうことなのではないかと思う。

6．方言の境界は存在するか？

方言区画は国是と矛盾しないどころか、自明の前提でもあるようだ。

言語地理学は一九三〇年代に林語堂、劉復等によって紹介されたが、それらは断片的な概要にとどまった。一九四一年、ベルギー人の宣教師、W・グロータースが山西省大同東南部地域に着任すると、そこで本格的な実践が始まった（『中国の方言地理学のために』、好文出版、一九九四）。グロータース神父の研究は趙元任等によって一種の驚きを以って受け止められたが（董同龢「華陽涼水井客家話記音」後記、『中央研究院歴史語言研究所集刊』19、一九四八）、一九四年以降に中国本土で現れた論評は、いずれも否定的なものであった。最も代表的な方言学のテキストである袁家驊『漢語方言概要』（文字改革出版社、一九六〇、第二章）は、「（言語地理学の創始者であるジリエロン等は）言語における方言差だけを認め、方言或いは方言区の存在を否定した」と批

判している。また、全体として少数の日常語彙を題材とする言語地理学は偏っており、「言語構造全体を記録すべし」との論調が強い。このことは、日本の戦後の一時期に展開された方言区画論と方言周圏論の論争における前者の主張と軌を一にする一方、方言調査の進展に伴って現れた欧州の反応とは異なる。次は、グロータース神父による日本方言学の紹介文の一節である。

錯綜する等語線に直面した言語学者の最初の反応は、方言の存在を否定することであった。…（中略）…方言境界線が極めて多様であることについての、ヨーロッパのこのような反応は、十九世紀後半の言語学者に限られたことではなく、その後も様々な形で現れている。ところがこのような見解は日本では決して見られなかった。それはなぜか、と問いたい。

（W.Grootaers 1982, 331－332頁）

「言語構造全体を記録すべし，その場合県を単位とする」という方針は、上田万年の指導になる国語調査委員会（一九〇二年設置）の基本方針であり、その後、『音韻分布図』（一九〇五年）、『口語法分布図』（一九〇七年）が出版されて、口語語彙分布図を欠くのは偶然ではない。ここに於いて、東洋の日本と中国はほぼ同じ歩みを辿ったと言える。異なるのは、日本の場合、A・ドーザ（Albert Dauzat）の *La géographie linguistique*（1922）が早くも一九三八年に邦訳・出版されたように（松原秀治訳『フランス言語地理学』）、いち早く本格的な言語地理学が紹介されたこと、またその方法が柳田国男、小林好日、小倉進平等によって、実際の方言調査と分析に適用されたことである。『日本の言語学』第6巻（大修館、一九七八）は日本の方言学の四十三篇の名著を収

録しているが、うち十二篇が方言区画、十四篇が方言地理学に分類される作品であり、日本の方言学がどちらにも偏らないバランスのとれた発展を辿ってきたことを間接的に証明している。

地図2に示した淮河—秦嶺線がその典型であるように、方言の境界線は確かに存在する。実際に方言地図を作ってみれば、多くの等語線が密集して現れるエリアとそうでないエリアがあることがわかる。前者に着目すれば理屈の上では中国全土の方言区画が可能なはずである。しかし、現実はそう簡単ではない。上に挙げた漢語方言の各「語」の中で、隣接する「語」との方言境界線が等語線の束によって最もはっきりと区別できるのは閩語である。しかしそれにしても、客家語と共有される重要な音韻特徴もあり、例えば前掲、項書の図5—15（341頁）では、客家語地域が閩語の中にすっぽりと納まってしまう。故に、前述のノーマン氏が、客家語を閩語と同様、Southern Groupの一支と断じたのも、全く道理にかなった説なのである。

言語地理学が「方言或いは方言区の存在を否定した」という批判は、実際のところ、誤解を含む。グロータース神父は、前掲『中国の方言地理学のために』（84頁）において、「中国を分断する文化勢力圏の間に境界線を引く」という方言研究の一つの目的を明確に語っている。その一方で、方言を構成する諸要素が絶え間なく「越境」を繰り返していることもまた事実である。「越境」は要素ごとに個別に行われる。語彙地図を作ってみれば、各語形に関する等語線が錯綜することが実感されるだろう。それどころか、等語線の位置を確定することすら困難なケースに遭遇することもある。言語地理学が「方言の存在を否定し」、「各語はそれぞれ固有の歴史を有する」なる

スローガンを掲げたのは、音韻法則の投影であることが期待された地理的分布が、その期待をことごとく裏切ったことに対する反動であり、真理は別のところにあるのだ、という一種の警句であった。

調査、資料整理、作図、地図の解釈という一連のプロセスを体験した者なら、地図上に広がる無数の言語変異形に目を奪われ、それらがなぜ、どのように生まれ、現在の分布領域を形成するに至ったかに興味をもつに違いない。ジリエロン（Jules Gilliéron, 1854-1926）をはじめとする欧州の言語地理学の創始者たちにとって各語の歴史を明らかにする作業は、方言の境界線を定める作業よりもはるかに価値のあるものに映ったに違いない。我々が二冊の漢語方言地図集を出版するまであしかけ二十年の時間がかかったが、その過程でヨーロッパや日本の先達が味わったであろう知的興奮を追体験することができたと思う（岩田礼編『漢語方言解釈地図』、白帝社、二〇〇九、『漢語方言解釈地図　続集』、好文出版、二〇一二）。言語地理学の一つの不幸は、根気と忍耐力を要する一連の作業プロセスの最後の段階、即ち地図の解釈において異論が出やすいことである。分布が複雑であればあるほど、作者がなぜそのような解釈（解答）に至ったのか、理解が困難になることがあり、畢竟、同じ作業の追体験が必要となる。言語地理学は経験科学だといえる。北京語言大学の曹志耘教授の編集になる中国初の項目別言語地図集『漢語方言地図集』（音韻、語彙、文法の三分冊、商務印書館、二〇〇八）が出版された時、各地図の凡例はあっても解説がないことに当初驚かされたが、それはなまじ解釈は加えないという一つの見識であった。

徐通鏘『歴史言語学』（商務印書館、一九九一）は、「各語はそれぞれ固有の歴史を有する」という言語地理学のスローガンは、「不規則的現象のなかに言語変化の規則性を発見するための努力を怠っている」と批判する（第十章）。言語地理学は、地図の解釈のための定式化を確立していないという意味において、徐氏のこの批判は正しいと思う。それは、言語地理学が都市の言語変異を素材とした後発の社会言語学に主役の座を譲った原因でもあった。しかし、日本では言語地理学が独自の発展を遂げた。研究量の豊かさは世界有数である（上掲 W.Grootaers 1982 参照）。研究の質についても、社会言語学を先取りしたグロットグラムがあり、また柴田武『言語地理学の方法』（筑摩書房、一九六九）と馬瀬良雄『言語地理学研究』（桜楓社、一九九二）は、「言語変化の規則性を発見するための努力」として特筆されるべきである。我々はこれらの研究成果をふまえながら、中国語方言について得られた知見を還元し、言語変化の普遍性の解明に貢献したい。

7．おわりに

私の精神的支柱であったグロータース神父は、一九九九年に神に召された。しかし、その四年後の二〇〇三年に、『中国の方言地理学のために』が石汝杰教授の翻訳によって中国で出版された（賀登崧『漢語方言地理學』、上海教育出版社）。この訳書はその底本である日本語版より売れ行きがよく、二〇一二年には増補新版が出版されている。ちなみに二〇〇三年という時期は、ちょうど曹志耘教授が『漢語方言地圖集』のための現地方言調査を開始された時期と重なる。

言語地理学に対する現在の評価は、曹志耘教授の次の文章が代表的なものである。

「グロータースの研究＝中国の地理言語学なのではない。グロータース式の研究はおそらく初期の地理言語学または狭義の地理言語学であり，それは中国地理言語学の一部にすぎない。むろん，非常に重要な一部分であるが。」（曹志耘「地理語言學及其在中國的發展」、『中國方言學報』第1期、二〇〇六）。

この評価は代表的なものであるが、同時に好意的なものであることを認識する必要がある。なぜなら方言の地理的研究の意義を全く認めない研究者も多いからである。

『漢語方言地図集』の出版後、方言の地理学的研究は次第に裾野を広げつつあり、「中国地理言語学国際学術研究討論会」が過去三回開催されている。

第一回　二〇一〇年　北京語言大学
第二回　二〇一二年　南京大学
第三回　二〇一四年　暨南大学（広東）

私自身は過去十年間、日本及び中国、台湾などで多くの若手研究者に言語地理学の方法とその意義を話す機会を得てきた。受講者は例外なく新たな知識の吸収に貪欲であるので、一方的に話すのではなく、対話の中でこちらが刺激を受けることも多い。無論、上文第三節で述べたような漢字を通じて言語現象を見る習慣が身についているのは避けがたいことであるが（『中国の方言地理学のために』、34-35頁参照）、それは一種の異文化コミュニケーションである。

［追記］

小論の内容は、平田昌司氏の論文の引用やいくつかの見解を除いて、すでに左記の拙文で述べたことのエッセンスになっている。詳細はそれらをご参照いただきたい。

・*Encyclopedia of Chinese Language and Linguistics*, Editor-in-Chief: Rint Sybesma, Brill, 2016 の Chinese Dialect Geography（Geolinguistics）及び Dialect/Language Atlases of China の項目

・「中国における河川と方言」、『金沢大学中国語学中国文学研究室紀要』、第15輯、二〇一六

・「書評：項夢冰・曹暉『漢語方言地理學―入門與實踐』」、『語言学論叢』（北京大学）、商務印書館、第43輯、二〇一一

・『漢語方言解釋地圖 *The Interpretative Maps of Chinese Dialects*』の「緒論」、白帝社、二〇〇九

・『『漢語方言地図集』と曹志耘さんのこと」、『東方』338、二〇〇九

・「現代漢語方言の地理的分布とその通時的形成」、遠藤光暁編『中国における言語地理と人文・自然地理（7）：言語類型地理論シンポジューム論文集』（科研費研究成果報告書）、二〇〇〇

［引用欧文文献］

Dauzat, Albert 1922. *La géographie linguistique*, Librairie Ernest Flammarion.

Grootaers, Willem 1982. Dialectology and Sociolinguistics: General survey. *Lingua* 57: 331-332.

Karlgren, Bernhard 1915-1926. *Etudes sur la Phonologie Chinoise*, Leyde : E-J. Brill, Stockholm.

Norman, Jerry 1988. *Chinese*, Cambridge University Press.

Sagart, Laurent 1993. Chinese and Austronesian: Evidence for a Genetic Relationship. Journal of Chinese Linguistics. 21-1

Zavyalova, Olga & Ellena Astrakhan 1998 *The Linguistic Geography of China*（遠藤光曉『中国における人文・自然地理（一）』）